

すずめ

小川未明

青空文庫

冬の日は、ふゆ ひ 昼過ぎひるすになると、急に光きゆうひかりがうすくなるのでした。枯かれ残のこったすすきの葉はが黄色きいろくなつて、こんもりと田たの中なかに一ひとつこ所ろしげ茂もつていました。そこは低地ていちで、野菜やさいを作つくることができないので、そうなつているのかもしれない。往來おうらいからだいぶ離れはなていましたが、道みちの方ほうが高いたかいので、よくそのあたりの景色けしきは見下みおろされるのでした。晩方ばんがたになると、すずめたちは、群れむをなして、森もりの中なかの巢すへ帰かえつていくのでしよう。チュン、チュン、鳴きな交かわしながら、空そらを飛とんでいきました。彼らかれが、ちようど、そのすすきのやぶの上うえへさしかかろうとすると、ぱつとして、驚おどろいたように、急きゆうに群れむが乱みだれたのです。なぜなら、下したのすすきの中なかで、

声をかぎりこえに自分じぶんたちを呼よぶ友ともの声をきいたからでした。

「どうしよう、だれか呼よんでいるじゃないか。」と、先頭せんとうに立たつて、飛とんでいた一羽わが、仲間なかまを見みまわしていました。

「いいえ、いつてしまおう。」といったものもあります。

「きつと、餌えさがあるから、降おりろというのだ。」というものもありました。

すると、中なかには、

「いや、そうじゃない。どうかしたんだ、助たすけてくれといっているのだ。」と、いったものもあります。

こうして意見いけんがまちまちであつたので、彼かれらは、そのまま先さきへ飛とんでいくこともできずに、すすきの生はえている上うえの空そらを、二、

三べんもぐるぐるまわって、話し合つていましたが、こんなことに、かかりあつていてはろくなことがないと考える連中は、「じゃ、僕たちは、先へいくから。」といつて、その群れは二つに別れてしまいました。

「まあ、ああいつて呼んでいるのだ、いつてみよう。」と、残つた群れは、それから注意深く下のようすを探りながら、ぐるぐると空をまわつてだんだん下へ降りてきました。そのうちに勇敢な一羽は、勢いよく、つういと、その声のする方へ走つていきました。つづいて、二羽、三羽と、後についてやぶの中へ降りたのです。

このとき、どこからか、さつと雲のような灰色の影が、眼

前んをさえぎったかと思おもうと、たちまち網あみが頭あたまからかかってしま
いました。

「あつ、やられた！」と、思おもったときは、もう遅おそかったです。
網あみの中なかに入はいったすずめたちは、隠かくれ場所ばしょから出でてきた大おお男おとこの
手てにかかつて、殺ころされてしまったのです。

「いま、五羽わかかったね。」と、いこえう声こえが、往おう来らいの方ほうから、き
こえてきました。

男おとこは、また最さい初しよのようように、かすみ網あみをひろげて、落おとしの口くち
を開あけました。そして、自じ分ぶんはあちらのやぶの中なかに隠かくれて、おと
りのすずめを鳴なかすように糸いとを引ひきました。こうして、鳴なくこと
に馴ならされたすずめは、しきりに声こえをたてて鳴なきました。

また、前の^{まえ}のように、どこからか、新しく^{あた}すずめの群^むれが飛^とんで
きました。

「おい、どこかで、呼^よんでいるものがあるじゃないか。」

「どこだろう。」

「あのくさむらのようだ、早^{はや}くいつてみよう。」

しかしながら、彼^{かれ}らは、注^{ちゆうい}意^{おこた}を怠^{おこ}りませんでした。そして、

彼^{かれ}らの中^{なか}でも、ほかへ気^きを取^とられずに、まっすぐにいくものもあ

ったが、どうしても先^{さき}へいきかねて、声^{こえ}のする方^{ほう}へ引^ひき寄^よせられ

るものもありました。やはり、一、二へんすすきの上^{うえ}の空^{そら}をまわ

ってようすをうかがっていたが、男^{おとこ}が隠^{かく}れているのに気^きづかなか

ったと見^みえて、六羽^わばかり、一度^どにさつとすすきの中^{なか}へ降^おりまし

た。

男は、あわてたのです。大急ぎで、網の口を閉じにかかったが、すすきの葉にじやまされて、手ぎわよくできず、ちよつとまごまごするうちに、二羽、三羽、下をくぐつて逃げ出してしまいました。しかし、三羽ばかりは、ついに捕らえられてしまいました。

「あいつ、また三羽捕つたよ。」と、往來で見ているものが、いいました。

「ばかなすずめだな、さつさと飛んでいけばいいに。」と、いったものもあります。

このとき、男は、どんな人たちが、見ているのかと、支度をす

ませてから、道みちの上うへをながめました。

そこには、会社かいしゃ員いんらしい人ひとがいました。小僧こぞうさんがいました。

また、郵便ゆうびん配達はいたつがいました。それらの人ひとたちは、いずれも自じ転車てんしゃを止とめて、

わざわざ降りて、すずめをとるのを見みているのです。

「どうだ。うまいものだろう。」と、男おとこは、網あみを張はるたびに、かならず獲物えものがかかるのを、心こころの中なかで自慢じまんしていました。

「そうさ、これほど、おとりを馴ならすのは、容易よういのことじゃないのだ。まだ暗くらくなるまでに、幾十羽いくぱばかり捕とれるかな。」と、男おとこは、思おもいました。

けんぶつにん なか がっこうがえ しょうねん ふたり
見物人けんぶつにんの中に、学校がっこう帰りの少年しょうねんが二人ふたりいました。

「あのすずめの中のすずめが、鳴かなければいいんだね。」

「助けてくれと鳴いているんだろう。」

「そうかしらん。鳴いているので餌があると思つて降りるんじゃない。」

ふたり 二人の少年が、そんなことを話していました。すると、先刻網の中から逃げ出したすずめは、そのまま遠くへいったかと思つと、またもどつてきて、田のあぜに立っているなら木の枝に止まりました。そして、しきりに、チュン、チュン、と鳴いていました。

この時分になると、東の方から、西の方の森を目がけて、帰つていくすずめの群れが後から、後からとききました。

「ほら、またきたよ。きつと網あみにかかるから。」と、見物人けんぶつにんが、
 いつていきますと、すずめの群むれは果はたして、すすきのやぶの頭あたまに
 くと、ぐるぐるとまわりはじめました。

枝えだに止とまって、鳴ないている二羽わのすずめは、

「あぶない！ あぶない！」と、いうように鳴なきつづけていまし
 た。

「おいしい餌えさがあると思おもっているんだね。」

「そうかしらん。」

二人ふたりが、こんなことをいつていけると、舞まっていたすずめたちは、

勢いきおいよくすすきの中なかへ降おりていききました。それよりも、驚おどろいたこ

とは、枝えだに止とまっていた、先刻さつきやつと網あみの中なかから逃にげ出だした二羽わ

のすずめが、これも先を争って、ふたたびすすきの中へ飛んでいったのを見たことです。

「あつ、みんな網にかかつてしまった。」

これを見ていた二人の小学生は、なんだか息詰まるような気がして、目をみはりました。男は、大急ぎで獲物を片っ端から殺して、袋の中へ入れていました。

「ばか！」と、このとき、大きな声で、どなったものがあります。それは、道の上で見えていた小僧さんでした。

「いいかげんに殺生やめろ！」

こういつて、憤慨した、職人ふうの男もいました。すずめをかわいそうに思ったのは、二人の少年だけではありません。

ん。ここに立^たつて見^みているものが、みんな心^{こころ}にそう思^{おも}つたのです。「やはり仲^{なかま}間^まが捕^{つか}まって、苦^{くる}しんでいるのを助^{たす}けようとして降^おるのだな。」と、配^{はい}達^{たつ}夫^ふがいました。

「まったくそうらしいですね。」

こんな話^{はなし}を、見^みているものがしていました。これを聞^きいた二^{ふた}人^{たり}の少^{しょう}年^{ねん}は、

「それごらん、餌^{えさ}を食^たべたいと思^{おも}つて、降^おりるんでないよ。」

「仲^{なかま}間^まを助^{たす}けようと思^{おも}つて降^おりるんだね。」

こういうことを、二^{ふた}人^{たり}が知^しると、だまされて網^{あみ}にかかると、
 たちが、ほんとうにかわいそうになりました。

「こんな、罪^{つみ}になるものを見^みていられん。」と、小^こ僧^{ぞう}さんが、急^{きゆう}

に自転車じてんしゃに飛び乗のつてチリン、チリンと走り出はししました。

「さあ、時間じかんがおくれてしまつて、たいへんだ。」と、配達夫はいたつぷも、また自転車じてんしゃを飛ばとしていきました。

あたあたらら新しい見物人けんぶつにんが、また足を止あしめていました。はじめのうちは、すずめのかかるのをおもしろがつて見みているが、しまいには、後あとから、後あとから飛とんでくるすずめが、だまされて、友ともだちを助たすけようとして、すすきの中なかへ降おりて、網あみにかかると、かわいそうになりました。

「はやく、日ひが暮くれてしまえ！」と、腹立はらだちまぎれに、いったものもあります。すずめを捕とっている男おとこは、これで生せい活かつをするのか、根気こんきよく、いつまでも仕事しごとをつづけていました。見物人けんぶつにんか

ら、なんとののしられても、さも聞きここえぬようなふうをして、すすきの中に隠かくれて、おとりのすすめを鳴なかすのに、苦心くしんしていました。糸いとを引ひくと、すすめは、ほんとうに苦くるしそうに、鳴ないていました。

このとき、二人ふたりの少年しょうねんも、そこを去さつて帰かえりかけました。

「お友ともだちが呼よんでいると、知しらぬ顔かおをして、先さきへ飛とんでいけないのだね。」と、一人ひとりは先刻さつき、一度ど逃げ出だしたすすめが、ふたたび友ともだちを救すくおうとして、飛とび込こんで網あみにかかった光景こうけいを思おもい出だして、いいました。

「すすめって、感かんしん心しんな鳥とりだね。」と、一人ひとりが感かんしん心しんしました。

「僕ぼくたちだって、泣ないているお友ともだちを残のこしておいていけないだ

ろう。」

「いけないな。」

「神さまから、すずめも仲間^{なかま}は、助け合^あつていくようにと教^{おし}えられたのだね。」

二人^{ふたり}の心は悲^{かな}しかったのです。西^{にし}の空^{そら}は、灰^{はい}色^{いろ}にだんだん暮^くれかかりました。すずめのそうした性^{せい}質^{しつ}を知^しつて、落^おとしにかける男^{おとこ}が、憎^{にく}く思^{おも}われたのでした。それにもまして、二人^{ふたり}は、すずめたちの相互^{そうご}に助^{たす}け合^あう心^{こころ}を美^{うつく}しく、貴^{とうと}く感^{かん}じたのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕はこれからだ」フタバ書院成光館

1942（昭和17）年11月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年6月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

すずめ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>